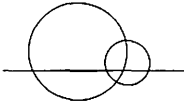


〔論文〕



山田純三郎と「中国新軍閥混戦」

— 孫文死後数年間の山田の軌跡 —

大学史事務室 佃 隆一郎

はじめに

愛知大学東亜同文書院大学記念センターの中心的所蔵・展示資料となっている「孫文、山田良政・純三郎関係資料」については、受け入れて間もない頃にライターの保阪正康氏と結束博治氏によって、その歴史的背景がそれぞれ単著にまとめられたのに続き、最近では同大学において、馬場毅教授が論文や報告にまとめ上げたとともに⁽¹⁾、(別項にある通り)山田良政・純三郎の兄弟が生まれた青森県弘前市を会場に講演および資料展示会を催すにいたった。

ただし、これまで検討や展示の対象にされてきたのは主に“孫文の革命運動に協力した山田兄弟”としての面であって、1925年に孫文が“革命いまだ成らず”の言を遺して没してから、弟の山田純三郎がとった行動については充分には解明されていなかった感がある。中国東北部で「日中十五年戦争」の第一段階である満州事変が起きた頃までの数年間は、中国国内は北伐、済南事件、張作霖爆殺事件などが相次いだ激動の時期であったが、南京の蒋介石率いる国民政府により一応全土が統一されてからも、日本ではあまり知られていないが「中国新軍閥混戦」とも呼称されている(国民党と共産党とのものとは別の)内戦が生じたのであり、実は純三郎はこの戦争に深く関わっていたのである。

そこで以下本稿は、その内戦の概略を述べた上

で、記念センターにある関連資料を主な手がかりにして、孫文の死後数年間の山田純三郎の軌跡をたどってみることにしたい。

1. 「中国新軍閥混戦」について

「中国新軍閥混戦」(以下、本文では「」略)とはかつて毛沢東ら共産党に、従来の「北洋軍閥」(袁世凱・張作霖ら)と対比する意で「新軍閥」と呼ばれた、国民党内の各実力派(蒋介石・汪兆銘・閻錫山・馮玉祥ら)が1927年7月の国共両党分裂後に展開した、論戦・武装闘争双方の形での争いをさす、中国大陸での一呼称である⁽²⁾。

さらに同混戦は、政治的な論戦を中心とした前半期と、軍事的な闘争を中心とした後半期とに大別されている。また、前半は実力派相互の争いであったのが後半には、南京国民政府の総統となった蒋介石と、その他実力派の争いへと完全移行し、反蔣側も対抗して北京(当時「北平」)に“新政府”を設立するまでにいたったが、1930年5月から11月にかけて両派が華北地方で激突した軍事決戦「中原大戦」において、蔣側が勝利をおさめたことで大勢は決し、さらに翌年9月に日本現地軍(関東軍)が起こした満州事変によりほぼ収束した。

その中国新軍閥混戦と、日本との関係についてであるが、中国の研究者の中には新軍閥混戦を「帝国主義間の中国での激烈な争奪を反映」⁽³⁾したものと捉えている人もいて、当然日本政府・軍部の同混戦への関与も多く指摘されている。



写真① 山田純三郎（右端）と日中両国の関係者
写真裏の添え書きによれば、1927年に上海の江南
晩報社前で撮影されたとのこと。左端の2人が
西山会議派の居正（上）および謝持（下）とある。
（山田順造氏寄贈、愛知大学東亜同文書院大学
記念センター所蔵—以下同—）

すなわち、混戦の前半は日本の田中外交期に、後半は幣原外交期にそれぞれ時期が相当している
であり、前半期では、東方会議で確定された「当分
（中国）各地方の穏健なる政権と適宜接洽」⁽⁷⁾と
の一方針に基づき日本が新軍閥へも接近・援助を
していたと指摘されていて、つづく日本の「山東出
兵」、上陸した日本軍が蒋介石軍と衝突した「済
南事件」、蔣軍の北伐達成後北京を脱出した軍閥
を乗せた列車を日本軍が爆破した「張作霖爆殺」、
東北軍が蒋介石に帰順した「東三省易幟」とい
った一連の流れにおいても、新軍閥混戦との関連が
示唆されている。

そして後半期では、外交の転換により日本は表
面上は混戦への不干渉をとるようになったが、実
際は軍部を中心に反蔣軍支持の形で、干渉は隠密
裡に継続・拡大されたと思なされていて、結論と
しては、日本が支持した各派親日軍閥が進めた軍
閥戦争はすべて失敗したものの、直後に満州事変
を發動しえたことから、中国新軍閥混戦は「日本
の対中武力侵略の道を開いた」⁽⁸⁾と位置づけられ
ている。

このように、中国では“満州事変の一背景”と
して重視もされている新軍閥混戦であるが、当時

の日本（軍官民）の同混戦への関わりの有無・度
合については、日本ではまだ充分には解明されて
いない感があり、これが日本での同混戦への認識
の低さにつながっているのではないかと思える⁽⁹⁾。
その問題を検討する当面の手がかりとなるもの
として、『日本外交文書』や『参謀本部密大日記』
などといった外務省や陸軍の記録⁽⁷⁾があり、そし
てさらに愛知大学東亜同文書院大学記念センター
に所蔵されている、有力「大陸浪人」であった山
田純三郎がのこした書簡・写真などの史資料があ
るのである。

まず前者からは、陸軍各「支那通」軍人の混戦
への注視とともに、中原大戦期において反蔣軍へ
の援助を暗に画策していた現地陸軍と、その疑惑
の否定に努めていた陸軍中央部や外務省の姿が見
出せるのであり、そしてまた後者からは、孫文ら
の革命運動に協力していた山田が、この時期も反
蔣側に加わって混戦関係者の一員となっていたこ
とがわかるのである。このうち前者については、
筆者はすでに『軍事史学』誌上などで報告したと
ころであり⁽⁹⁾、以下ここでは、後者の面を明らか
にしていこうとする。

2. 山田純三郎の経歴と「山田家資料」

1876年青森県の弘前に生まれた山田純三郎は、
渡中して紆余曲折の末上海の東亜同文書院の教授
になったのち、南満州鉄道に入社して三井物産に
派遣された。その頃より純三郎は、辛亥革命前に
孫文らの運動を助けた実兄・良政（1900年の「惠
州起義」で捕虜となり刑死）の遺志を継いで、宮
崎滔天らとともに孫文の渡日や三井財閥への援助
要請等を支援し、革命の達成時には孫文の第一の
側近となった。

革命後孫文らが政権を失ってからも、純三郎
は広東で再起を目ざした国民政府に協力し、1925
年の孫文の臨終には、側に立ち会うことを日本人
として許されたごくわずかな人物となったのであ
り、その後も純三郎は孫文の遺志である“革命の

真の完成”のために、蒋介石ら国民政府の要人と連携する一方、日本政・財・軍各方面の対中関連人物との連絡役を果たし、中国新軍閥混戦では反蔣政府の一員に列したのである。混戦収束後も純三郎は、日本の敗戦まで上海に滞在して関連活動を続け、帰国後1960年に東京で没した⁹⁾。

このように孫文ら中国革命の要人に長年接触・協力を続けてきた純三郎のもとには、戦後に至るまで日中両国の各人より書簡・書画・写真など1千点余りが贈られ、東京の山田家に保存されていた¹⁰⁾。純三郎の四男にあたる順造氏は後年これらを整理し、伯父・父の事跡を顕彰しようと努めたが、公開に至らぬまま1991年に他界した。

順造氏の没後、良政・純三郎・同氏がいずれも南京や上海に存在した学校「同文書院」の関係者であったことから、同校の流れをくむ愛知大学(豊橋校舎)にそれら資料が寄贈され、東亜同文書院

大学記念センターのもとで整理作業が引き継がれたことで、1998年より同大学記念館内に開設された「東亜同文書院大学展示室」に、代表的な資料が展示されるにいたっている。

そのうち中国新軍閥混戦に関連する資料としては、同時期に純三郎が日本の家人に宛てた書簡が多数まともに残っている¹¹⁾。これは私的な性格が強いため公開性に難があるものの、当時の純三郎の行動と混戦の経過を示すものとして貴重である。ほかにも反蔣政府要人との写真(順造氏により説明が添記され、ファイルに分類)が相当あり、こちらは今後の活用が望まれる。

そこで以下は“家人宛て書簡”から、混戦期の純三郎の行動を〔表〕にまとめてみた上で、さらにそれら資料からうかがえる純三郎の(当時の国民政府内での)存在と役割を描き出す形で、各人の参考に処することにした。

〔表〕「中国新軍閥混戦」期の山田純三郎の行動

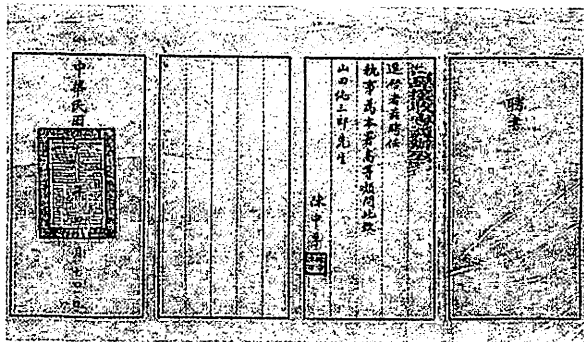
(表内の〔 〕は主要関連事象、地名は当時。純三郎の書簡〈愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵〉より作成)

場所	年月	純三郎の活動・私事	周囲の情勢
南京	1927	母の葬儀等で帰郷	中国情勢急転(蒋介石下野、
東京	8	居正と?再渡中(松井石根・	広西・広東衝突)
大阪	9	山本条太郎と相談のため)	西山会議派合同参加、南京入り
		蒋介石・居正と一時音信不通。	西山派が南京の丁公館に滞在
		馬超俊や陳箇民夫妻らと会見	
上海	1928		〔蒋介石復帰〕(1.9)
	7	中国語新聞の刊行実現に尽力	〔済南事件〕(5.3)
		(坂西利八郎?中将に軍部個	〔張作霖爆殺事件〕(6.4)
		運動を要請して賛成をえ、諸	〔北伐軍北京入城〕(6.8)
		官庁との交渉も成功し、さら	
	8	日中通商条約廃棄問題を憂慮	
	9	中国情勢で?帰国できなくなり、	
		代わりに大内暢三が「拡張案」	
		を持って帰国	
	10	陳中学と青島行きを計画する	
		も藤田栄介青島総領事が反対	
南京?	11	床次竹二郎と接触	陳中学の青島行きと日中交渉
			がともに行きつまる
			(東三省易幟)(12.29)
日本	1929	床次竹二郎のすすめで一時帰国	
	1	するも、田中義一首相との会見	
		不能や田中・床次両者の妥協	
		により上京できず失望	
上海?	2	陳中学一行を迎えて青島を接收	日中間の「済案」交渉が停頓
青島	2		陳の日中交渉が進展
上海	3		済案交渉調印、蔣桂戰爭勃発
青島	4	陳中学の活動未確定により	
		上京見合わせ	
		15日正式に青島の行政機関受	陳の「公表」が2,3日遅れた
		取り	もよう
		(青島接收専員弁公署高等顧問	
		間になり、陳の青島市長復帰	
		に尽力)	
(青島)	(4)		江南晩報への蒋介石一派の反発
南京	5		に対して、西山会議派につく
青島			陳中学の依頼でいったん南京へ
北平			西山会議派と広西派の提携進展
南京	6	2日の孫文移靈祭	
上海		(北平→南京)に参加	
青島		陳・芳沢謙吉公使・犬養毅らと	陳は居正派のため蔣派に嫌わ
		落ち合う?	れたことで市長に復帰できそ
		張継が犬養毅らと北上するまで	うもなく、彼の青島での運命は
		滞在?	悲観的ながらもまもなく確定?
広東?	7	馬福祥の青島市長就任で床次	
青島		竹二郎が政友会総裁になれば	〔日本の田中義一内閣総辞職、
		帰国するが、次の内閣まで見送	浜口雄幸内閣成立〕
		り?	政友会総裁更迭問題複雑化?
上海	9	一時帰国	蔣派劣勢、西山会議派優勢
日本			(で純三郎に有利)
上海	10	西山会議派や、蔣・馮玉祥・	
南京		李烈鈞・張静江らと会見	
上海?	12		
青島	1930		
	2	満鉄の用事で再上京を考	〔蒋介石と閻錫山が論戦〕
		えるも、北方有利でできなくなる	
上海	3	江南晩報社移転?	
南京	5	閻錫山総司令の最高顧問になる	〔反蔣軍結成〕(総司令閻)
上海	7	過度の攻撃により晩報休刊	〔中原大戦〕(5~11月)
		居正の不在で活動停頓	蔣軍の反攻失敗
			(拡大会議)(7.13)
北平	8	「新国民政府」設立等のため陳	
		箇民の後妻と北平にとどまる	山西軍、山東省で
天津			山東軍に大敗
	9		〔北平国民政府発足〕(9.1)
	11		〔閻・馮、蔣に帰順〕(11.4)

3. 混戦期の純三郎の行動

〔表〕のように、それら書簡群は周囲の情勢報告のほか、山田純三郎が国民党内の極右勢力であった「西山会議派」や日本の政財界人・軍人と、連絡を取り合ったり共に行動したりしたとの内容のものが少なくなく、中国新軍閥混戦期の一様相がうかがえる貴重な資料であるように思える。書簡群のうち初めの時期のものには、中国視察や東方会議を終えて間もない山本条太郎や森恪、さらには陸軍の代表的「支那通」であった松井石根中将と、日本や中国において会談・相談した（する）とのものがあるが⁽¹²⁾、話の具体的な内容は判然としないことから、ここでは1928年末の、政治家床次竹二郎の訪中について取り上げてみることにする。

日本陸軍の文書にある、上原勇作元帥宛てに書かれた差出人不明の書簡では、床次と南京国民政府要人との会談の様子がまた聞きで述べられているが、その中の蒋介石・戴季陶・胡漢民とのものが「菊池良一・山田純三郎氏内談」と書かれていることから、依然純三郎が（親類の菊池ともども）日本側とのパイプ役を務めていたことがまぎらうかえるのであり、さらに別の箇所にも、日中両軍が衝突した済南事件の解決交渉に関して、「陳中孚の青島特別氏接收委員任命について」⁽¹³⁾とあることもまた、純三郎の関係の広さを示している。



写真② 陳中孚から山田純三郎への招聘状
国民政府の「青島接收専員辦公署」高等顧問への
就任の招聘状。(1929年4月14日付。愛知大学
東亜同文書院大学記念センター内に展示)

なぜなら、純三郎の先の書簡群には、陳や青島に関したのも相当あるからであり、上原宛て書簡にある両方面から、当該時の純三郎の行動について見てみよう。

床次は当時民政党を脱退して「新党倶楽部」を結成したばかりであり、彼の訪中は新党の外交政策の実績作りとともに、政治資金の援助を仰ぐものとされているが、純三郎もそれから間もなく床次のすすめで一時帰国して、田中義一首相との会見を求めたとあることから⁽¹⁴⁾、床次の対中政策（蔣政府を承認して山東省からの撤兵を実行する一方で、東北部は張学良の独立国とし、日本の既得権益は張を立てることで守ろうとした）を日本の政財界に提言する役割を、純三郎が担っていたのかもしれない。しかしその政策も田中外交と同様、直後の東三省易幟で破綻をきたし、さらに床次は新党の活動不振や田中との妥協により、翌29年に当初所属していた立憲政友会に復帰したのであった。それに対して純三郎は、床次の転向に対する失望の意を書簡に示しつつも、その後も床次の政友会総裁就任運動への支援を続けたようである⁽¹⁵⁾。

また陳中孚関係では、純三郎は中国に戻るとすぐに青島へ行き、陳らを迎えて同市の接收に立ち会っている⁽¹⁶⁾。陳の（日本からの）青島接收について先の上原宛て書簡では、胡漢民が床次に「日本人と折合ひよき」陳を派遣するために、藤田栄助青島総領事への紹介を依頼したところ、床次は陳本人に紹介を快諾したとあり、陳は両国側から信頼されていた人物であったと思われるが、続いて書簡の筆者は陳自身の言質より、「早々膠東（注、青島周辺地区）一帯の雑色軍を招撫し、青島市を手に入れ山東に根を張らんとする所謂西山派の策動なるものは胡漢民一派に於て筋を引きあること明瞭」⁽¹⁷⁾と断じているのである。

純三郎は1927年の段階より書簡に、西山会議派と行動を共にしていることを記していることから⁽¹⁸⁾、ここでの陳との行動も指摘の通り、日本軍

の山東撤兵後における西山派の勢力拡大のためであろう。ただし純三郎は一方で、日中間の交渉の成り行きを懸念しているのであり⁽¹⁹⁾、両国間の問題解決や接收後の引き継ぎを円満に行なうために、陳に期待を寄せた面もあったはずである。ともあれ、日本軍の撤退を定めた日中協定が締結された2週間後の29年4月14日に、青島接收専員弁公署高等顧問に就任した純三郎は、翌日正式に青島の行政機関を受け取ったのであり、続いて6月の孫文移靈祭（遺体を北京から南京へ）参加の際には犬養毅ら日本側要人に陳とともに接触し、陳の青島市長への就任実現のために尽力したが、結局市長の座は、介入した蒋介石派の馬福祥に渡り、純三郎は蔣への反発と、反蔣派全体との接近を強めたようである⁽²⁰⁾。

ここで純三郎がとった反蔣手段は、上海で創刊した中国語新聞『江南晩報』による政府批判であった。純三郎は孫文在世時にも、新聞社社長になって論陣を張ったことがあり、『江南晩報』刊行は日本の政府・軍部・財閥との交渉によって実現したようであるが、今度は蔣政府の日本総領事館などへの抗議によって、中原大戦勃発直前の1930年4月ごろには停刊を余儀なくされた（翌々月『江南正報』として復刊）⁽²¹⁾。それに対して純三郎は、8月に反蔣派が集まって北京で開かれた中国国民党中央党部拡大会議に参加し⁽²²⁾、さらに9月同地で蔣の南京国民政府に対抗して結成された「北平国民政府」の総司令最高顧問に就任したのであって、その頃の手紙には中原大戦に至るまでの経緯や、開戦後の各戦闘の状況が克明に記されているが⁽²³⁾、東北部の張学良が蔣側に参戦して戦況が逆転してからの資料はほとんどなく、中原大戦終結期の純三郎についての詳細はいまだ不明である。

しかし、その後反蔣派が新たに結成した「広東国民政府」内で純三郎は、1931年9月の満州事変勃発時に関東軍司令官を訪問して、事態の收拾に奔走したとのことであり⁽²⁴⁾、事変にともなう反蔣連合の自主的な解消により中国新軍閥混戦が終幕



写真③ 山田純三郎も参加した、中国国民党中央党部拡大会議の様子（1930年）
これも写真裏に添え書きがあり、「七月十三日午後三時北京懷仁堂に於ける擴大會議全景 西山派、改組派、山西派、西北派などの各要人代表が聯合宣言に署名しつづつあるところ」などと記されている。

してからも、そして満州事変が日中戦争、さらにはアジア太平洋戦争へと拡大してからも、純三郎は一介の「大陸浪人」として、上海を拠点に日中平和の道を、蒋介石・汪兆銘両政府や日本政府・軍部（中央）とは一線を画す形で模索しつづけたのである。

むすびにかえて

数多い山田家関係資料の中には、純三郎宛ての手紙に添えられた「強固なる反蔣陣営を再建する必要に就て」という意見書も存在している⁽²⁵⁾。

これは「佐々木」という人物が過去の反蔣介石戦争、すなわち中原大戦をはじめとする中国新軍閥混戦を回顧した上で、今後の日中平和のためには中国国内の反蔣各派を再び結束させなければならないとしたものである。純三郎に出された時期は不明記であるが、文面より日中戦争に突入してから4年後、すなわち1941年の10月と考えられ、そうなればアジア太平洋戦争開戦直前の、日中戦争の行きづまりを背景にしての日米交渉の緊迫化が増した頃になる。また、姓のみ記された「佐々木」とは、陸軍の「支那通」の一人であった佐々木到一である可能性が考えられるが⁽²⁶⁾、そうした時期

や人物の検討のために加えて、この文書は反蔣各派や反蔣戦争について具体的に（主観的ながらも）述べられていることから、その全文を本稿の末尾に〔付録〕として別掲し、これも参考に処したい。

ただここで真っ先に認識すべき点は、山田純三郎が孫文の死後、中国国民党の要人や日本陸軍の「支那通」と幅広いつながりを持っていたことが、ここからもうかがえるということである。“反蔣

介石”という行動が、孫文の遺志にかなっていたのか、また日本の中国侵略をとどまらせるものであったのか、などの問題は確かにあろうが、純三郎が戦後（国共内戦に敗れて台湾に逃れた）蒋介石とよりを戻し、日台双方の関係者より厚く遇されたことを思うに、それまでの純三郎の“空白期”を埋める試みは、今後も続行していきたいところである。

註

- (1) 保阪正康「仁あり義あり、心は天下にあり」（朝日ソノラマ、1992年）、結束博治「醇なる日本人」（プレジデント社、同年）、馬場毅「孫文と山田兄弟」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第126号、2005年）、同「東亜同文書院関係者の中国革命支援」および「孫文を支援した山田兄弟」（『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』第2号、2008年）。
- (2) 「中国新軍閥混戦」という呼称（毛沢東の言にちなんで1980年代より、張同新氏や王光遠氏らによって提唱）、さらにはその定義自体について最近、“中国共産党中央史観”などとの見地から否定的な意見が出ているようであるが、ここでは便宜上の仮称としてこの呼称・定義を用いることにする（もっとも、筆者としては思想的な意図はないことを理解されたい）。
- (3) 李静之「試論蔣馮閥中原大戦」（王檜林・魯振祥編『中国現代史百題下』、湖南人民出版社、1982年）917頁。原文を筆者訳。
- (4) 外務省編『日本外交年表並主要文書下』（原書房、1966年）101頁。原文の仮名はカタカナ。
- (5) 鄭全備「日本帝国主義与一九二七到一九三一的中國軍閥戦争」（『廈門大学学报』1982年第二期号）124頁。原文を筆者訳。
- (6) 「中国新軍閥混戦」こと、当時の国民党内戦については、最近になって小林道彦氏が「日本陸軍と中原大戦」（『北九州市立大学法政論集』第32巻第1号、2004年）で詳しくふれたが、同論では「日本の満州事変研究は」この情勢に対して「十分な関心を払って来なかった」（2頁）としている。
- (7) 『日本外交文書』（外務省編、シリーズで刊行）では『昭和期I第一部』の第4、5巻に、『参謀本部密大日記』（時期ごとに各文書を製本、防衛省防衛研究所図書館蔵）では1930（昭和5）年の各月分に、それぞれ記述が見られる。
- (8) 拙稿「『中国新軍閥混戦』と日本陸軍」（『軍事史学』第36巻3・4合併号、2001年）のほか、同「『中国新軍閥混戦』への諸考察」正、(2)、(3)（『愛知論叢』第57、59、61号、1994、95、96年）を参照されたい。
- (9) 前掲保阪著、結束著、馬場各論文参照。なお、従来は純三郎を“孫文の臨終に立ち会うことを許された唯一の日本人”と紹介されていたが、馬場氏の調査によればほかの日本人もその場に同席していたとのことであり（前掲「孫文と山田兄弟」110頁）、本稿の記述もこれに従った。
- (10) 今泉潤太郎・藤田佳久「孫文、山田良政・純三郎関係資料について」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第97号、1992年）および、今泉・佃・藤森猛「孫文、山田良政・純三郎関係資料補遺」（『愛知大学東亜同文書院大学記念センター記念報』VOL. 4、1996年）、今泉・武井義和「…補遺（続）」（『…記念報』Vol.5、98年）に、山田順造氏からの各資料のリストを収録。
- (11) 同前今泉・藤田論文内目録459～469頁が該当部分（筆者が整理を担当）。
- (12) 同前464～466頁。南京虐殺事件の責任を問われ、のちに極東軍事裁判で死刑に処せられた松井の、純三郎との関係については前掲結束著の256～260頁に述べられているほか、『歴史と旅』1990年特別増刊号「帝国陸軍将軍総覧」の176頁には、「東京裁判の公判中、孫文の革命を助けた山田純三郎が、親しかった蒋介石に松井大将のことを頼んだところ、蒋介石の返事は、『松井大将は日本の代表としてだから仕方ない』であった」との、萩原雄二郎氏による記述がある。
- (13) 上原勇作関係文書研究会編『上原勇作関係文書』（1976年、東京大学出版会）622～625頁。日付は昭和3（1928）年12月15日。
- (14) 前掲今泉・藤田論文内目録460、461頁。会見の目的は不明（結局会見できず）。
- (15) 同前465、467頁。
- (16) 同前461、464～467頁。孫文の同志の一人で、純三郎とは古くから親交があった陳中孚（1882～1958）は、青島市長のほか（反蔣介石派の）広東国民政府政務委員、（蔣との妥協後の）中国国民党中央候補委員、（日本の影響下にあった）冀察政務委員会の外交委員会主席を歴任し、中華人民共和国成立後日本に亡命して東京で没した（葬儀には純三郎が委員長

- に推薦された。前掲結束著 259、260 頁および、愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵の山田順造氏整理ファイル「陳中孚先生」〈分類NaB - 54〉内の資料より)。
- (17) 前掲『上原勇作関係文書』624、625 頁。
 - (18) 前掲今泉・藤田論文内目録 460、465 頁。反蔣介石・反共産党を旗印とした西山会議派の中心人物には居正や謝持がいて（写真①参照）、その名は 1925 年 11 月に北京西山碧雲寺の孫文霊前で開かれた、同派要人の会議による。
 - (19) 同前 460、465 頁。“日中交渉が行き止まった”とある。
 - (20) 同前 461、464 頁。陳中孚の青島接收委員任命について、国民政府外交部長は日本の南京領事に対し、自らは無関係とした上で必要以上の権限を陳に与えさせぬよう要請している（外務省編『日本外交文書 昭和期 I 第一部第三巻』、1993 年、同省、555、556 頁）。
 - (21) 同前（今泉・藤田論文内目録）469 頁。交渉については諸官庁や三井・三菱のほか、陸軍の坂西（利八郎か）中将とも行っていたようである（同 463、468 頁）。
 - (22) 民主政治化と国民会議招集をめざして開かれたこの会議（通称「拡大会議」）であったが、この頃より孫文からの継承権をめぐる内部対立が顕現化してきた。山田順造氏からの写真には、拡大会議時の純三郎と各要人のものもあり（愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵の順造氏整理・命名アルバム『第一～三革命 孫先生葬儀 大・昭 中国友人』〈目録未収録〉に所載）、本文中の写真①③はそれによるものである。
 - (23) 前掲今泉・藤田論文内目録 468、469 頁。その中で西山会議派が、反蔣各派を相互連絡しているとの内容のものが特に注目される（同 468 頁）。
 - (24) 前掲結束著 238 頁。ほかにも純三郎は満州事変直前に、広東反蔣政府の陳友仁外交部長を日本に派遣して、幣原喜重郎外相と日中同盟のための交渉をさせたともある（同 233～238 頁）。
 - (25) 前掲、山田順造氏整理ファイル「陳中孚先生」に収録（中身のみ）。
 - (26) 佐々木到一は中原大戦時、内地の豊橋第十八連隊長を務めていたが、それまでは中国で公使館付武官補佐官や南京駐在武官を歴任し、北伐戦争時には蔣介石の国民革命軍総司令部に従軍した、国民党と関係の深い人物であった（戸部良一『日本陸軍と中国』、1999 年、講談社選書メチエ、に詳述）。

〔付録〕「佐々木」より山田純三郎への書状・意見書

(原文-縦書き-のまま。〔 〕内は補注)

拜啓 貴下御留守中小生は廿二日東京出發前晩神戸ニ着き 廿四日葉君を見送りして同時に神戸より長崎ニ向ふ 直ぐ長崎市ニ入る筈の處 汽車中種々の事情ありたるニ付き諫早驛ニ下車し 廿五日早朝バスにて雲仙ニ参り候 何年前長崎の御宅に御厄介に掛けたる事も有之候 今は御宅も上海に引揚げ 成るべく長崎の家を不為□なる事を避け特ニ此雲仙ニ来り二日間滞在中在京の時は氣を落着かず 筆を取れぬ分當地にて漸く一書を草し 別紙御送附申上候間御賢察被成下度候 要綱は何れ貴下大島ニ於て御書きなされたる事ニ存上候 小生の草稿は唯貴下の参考として書き上げたものニ付き 何卒御閲覧の上貴書ニ組入れが出来れば幸甚しき 小生は本廿七日バスにて長崎の家に帰り三四日位家に居りて 路を迂廻ニなるも島原を経て熊本ニ渡り熊本より別府に行き 更らに別府より船に便乗して大阪へ来る豫定 其上帰京可致候 来月早々となるかも知れぬ 若し急用有之候は、小生長崎の家ニ御打電被下度候 小生長崎出立の時は何れ又電報で御通知可申上候

先は用事のみ 匆々不一

十月廿七日 佐々木

山田様 侍史

強固なる反蔣陣営を再建する必要ニ就而

一、事変前は各派が各地に於て反蔣の陣営ありしも 其強固を缺きたる事と各派自身の聯絡不健全と 及び日本の對反蔣派の主張も不一致と徹底なる反蔣の方針無きが為め 遺憾ながら反蔣各派は数年間に於て各地で相前後して皆な敗績

を取り 今や之れを演じ抗戰を以て割期的の反蔣⁽⁷⁾を停頓せるのみならず 蔣氏抗戰時期を利用して却而反蔣を變じて擁蔣となる傾きあり若し其反蔣が成功して居れば 或は此度の事変も免かれたるかと思ふべし 今後も猶ほ蔣氏を下野か外遊でもさせねば兩國の不幸事は益々擴大と延長ニ陥れり されと其方法と時と緞祕の計劃があらざれば前轍を蹈む虞れあり 先づ之れまでの其過去の失敗を説き又將ニ来らんとする方法を述べ

過去廣西派は武漢附近で蔣軍に邀撃され一敗地ニ塗れ 兩湖の地盤を取られ僅かの殘軍を引いて廣西に逃還せり 其後續いて山西省の閻錫山と西北の馮玉祥との聯合して又反蔣の旗を挙げ閻は華北と山西省 馮は西北より河南省に至る聯合軍を以て蔣軍ニ對峙する事久し 將ニ決まると為らんの處奉天張學良蔣派より説伏され 兵を天津と北京一帯ニ進駐ニ依りて閻馮も又敗られたり 其翌年民國二十年〔1931年〕頃廣西派の李〔宗仁〕白〔崇禧〕再び廣東の陳濟棠一派ニ協力を以て兩廣で獨立し 之れは反蔣の旗幟鮮明なるが故漸やく蔣介石の下野の目的を達し處 其時蔣の勢力は既ニ南は雲南まで伸べ 北は長城外にも及ぶ其潛力盤根の如し 尚ほ下野の際自分の信任ある部下を江蘇、浙江、安徽、四省 乃ち南京反蔣政府の肘腋の許ニ各省の主席を配置して 再起の預線⁽⁷⁾を張りたる上故郷奉化ニ歸れり 其後反蔣派は孫科を以て政府を組織し孫科自ら行政院長と任す 然れとも蔣氏預線の四省の主席は孫科の命令を服従せぬ為め 財政の梗塞と他の種々の事情ニ出會ひ短命内閣となり 僅か一ヶ月を以て孫科は辭職ニ止む得ざるニ至り 蔣は前の伏線の功を奏して三度⁽⁷⁾面南京ニ入り汪精衛を行政院長ニす 蔣は軍事委

員會を組織し南京政府の最高機関として畸形の軍事委員長となり軍事政事一切ニ掌握し獨裁政治を取り萬能の擅專を以てせり 汪の在職中最後三發の彈丸を以て汪を其場ニ倒す 汪は本國ニ居る事不安と恐れ外國に走り 偶々西安事件起りや機を見る事敏の汪氏は獨逸より帰國を急ぎ 途半はにて蔣は張〔学良〕楊〔虎城〕一派と共産党との妥協成立せり 汪より一足早く張学良の飛行機で張学良自らパイロットで洛陽ニ着陸 同道で南京ニ歸れり 汪其事聞知した時は引還へるには出来ず 船中で茫然自失ニ折れたるも政権を取る機會を失す 同時ニ各反蔣派は隱忍して雌伏せりも 然し反蔣の念は愈々熱烈なるも地盤既ニ失ひ 或は僅かの地盤を守るのみ蔣には表面服従せねばならぬ 是れで期せずして抗戰の政策を唱へ 之れを假りて反蔣の目的を達せんとす 日本も反蔣派ニ対する方針不徹底の爲め 偶蘆〔盧〕溝橋事件起るや星々の大を遂燎原の炬となり戦争ニ至り 今日反蔣派事変中は反蔣の路を蔽塞され其目的を達せず 抗戰の政策の途ニ辿りツ、あり 事変落着すれば必らず反蔣の舉再燃する事は必せり 今後は日本の方針を誤らぬ様 豫かじめ準備して方針を建てる事

二、人物の精選

革命軍北伐成功の後 舊軍閥と政治家の系統は北方ニ於ては僅か閻錫山と馮玉祥のみ北方ニ居りて北伐ニ響應し 南は四川、雲南及び早く革命軍ニ合して共ニ北伐ニ加へたる李宗仁白崇禧系丈け 馮は早くに崩壊せり 閻も一度は失⁽⁷⁷⁾遂せるも山西省に於て潜勢力深きが爲め 間もなく又山西省の地盤を恢復の機を得たり 四川雲南系は北伐ニ参加せざるも未だ表面で反蔣の軍を擧げたる事なきも 以て蔣氏との暗闘で常ニ戒心中にして 一昨年四川劉主席は武漢ニ於て変死せり 李白は早く北伐ニ参加したる爲め 蔣氏とは屢々事を構へたる事あるも 何分瘦せたる廣西省の地盤丈けては到底蔣ニ叶はぬ 反蔣

の成功覺束ず 故ニ蔣と時々即す 時々離し 今は抗戰中對外一致の建前として共ニ抗戰して居るも 一朝和平を成立せば双方より邪見を起る事必せり 其他前安福系と直隸派の殘党は革命軍の北伐ニ敗績ニ依りて地盤を失ひ 又は職権を奪はれたる故ニ國民黨を敵視するも 此兩系は既ニ時代ニ遅れ時代より置き去りたるも 彼等は是れを氣付がずして 唯自分職の爲め國民黨の反蔣と國民黨を恨み丈けあるも 人民の同情もなきれば一向共鳴もせぬ 其部下達は蔣氏の許ニ走り屈膝して獵官の運動を以て恥とせずのみ 未だ蔣氏ニ走らぬ残り者は今回事変中北支ニ於て多少政権を得たりしも 時局の憂慮も認識もせず政権もなきれば手脈も持たぬ 南ニ知己も無し 唯外力を假りて職権得る爲め國民黨や蔣氏を反對するも 絶叫すればする程人民は相躍らず 却而人民より賤薄と見られで終るのみ 世は既ニデモクラシイより全体國家の今日 彼等は徒らに墨守ある能事とす 或は愚民政治を施行の輩等は將ニ清算されたる事も目醒めず 故ニ南方の政治家ニ敵せず 又蔣氏ニ取りては何等の痛痒も感せず 北支ニ於ては新人物と渴望して止まぬ 唯自分の職権を得るの圖りて登場する反蔣派で無く 堂々たる蔣氏の政策を打ち勝つ 又は時代ニ應じ主張を持ツ事変後の親日家で無く 日支兩國親善の信念を恒ニ牢固たる意見を持ち居る人を以て 南の舊軍閥の聯絡と操縦の出来る事と 又は國民黨ニ知己を澤山ある人でなきれば南の人を共鳴ニならぬ故 是非時代ニ遅れぬ人を物色して北支ニ据置き 徐々ニ反蔣の實を擧げ得る人を必要となり

三、強固不拔の地盤を選定する事ニ付き

強固不拔の地盤ありて始めて反蔣の計劃ニ成る 事変前の反蔣派は強固不拔なる地盤の根據地なきが爲め 數年間に於て蔣氏ニ個々別々の反蔣派⁽⁷⁸⁾撃破せられ 事変後の反蔣派は人物精選せざるが爲め又何事も成し⁽⁷⁹⁾解げを得ず 遂ニ事変は長期性ニ至り兩國の不幸事益々拡大とて

止まぬ 今北支は乃ち不拔の地盤を出来 若し依然反蔣の人物を得られねば 折角の良き地盤を持ち居るも何の役にも立たず 常ニ失意政治家の獵官運動の場所として提供するのみは實ニ遺憾を繰返す事と存じ 南北の反蔣派は抗戦中と雖とも決して反蔣を忘れて居らぬ 唯時局牽制で暫く停頓あるのみ 之れて不拔なる地盤を利用し策源地として秘密ニ計劃と聯絡を取られたる時は 必らず翕然として相黙契約の結合を行ひ得る 南反蔣派の自分の持ち居る地盤を戦火ニ依りて失はぬ内 何かの方法で地盤の保有ニ相俟て反蔣の陣營を再建する事は左程難事とは思はぬ 一朝和平を成立した暁は各反蔣派を連結して 直く反蔣の舉を起すの準備となり 今度は事変前と異りて反蔣は各派ニ聯絡もあれば不拔の地盤有る故 南北各反蔣派は非常之力ニ頼りになる側 蔣の事業も容易とならん 乃ち反蔣派再び撃破される虞れ多きが故なり 反蔣派は益々力を強化ニなる 遂には不徳と國家の政治を私する蔣氏ニ對して 全國的の反對で蔣の下野も外遊も實現するものなり 若し和平後依然蔣氏の天下であれば 蔣氏は愈々民族英雄氣取り 東亜の不為ニ至り 英米は益々東亜の問題ニ於て硬直ニなる 之れは事変處理ニ非常なる癌となり 地盤は中支より北支ニ如ず 之れは日本が常ニ反蔣の徹底的の援助出来るを以て尤も計を得たるものとす

四、全面平和と反蔣計劃の連鎖

日本は事変を四年越しに亘り 今は平和熟望せるも蔣介石と對手とせずの聲明あるが故ニ 蔣氏は平和の権をなきがニ依りて力あらん限り抗戦を續き軍事はもふ冬 重要な地盤日本軍ニ占領せられしも支那人民未だ蔣氏を棄てぬは但し抗戦時期ニあるが為め 之れで長びけば戦争は何時までも續けるものと覚悟せねばならぬ 支那歴代の歴史を讀んでも明きらかで相當ニ長き年月をかゝる事は勿論 日本は千載一遇ニ際會し益々南進政策の發展を謀るニ付き 支那事

變處理せねば南進發展の障礙となるべきもので 一日も早く時局の處理を急ぐ必要あり 併し蔣氏とは對手せずの聲明⁽⁷⁷⁾をあり 全面和平ニ就而は汪政府ニは既ニ望まぬ事である故 残りは南北派を合せ反蔣と和平と連鎖の計劃で進めるの一途ある 将来若し重慶政府とても對手する時は 人民と各派より蔣の敗け戦の罪と平和條件の責任を負はする様ニ帰宿となり⁽⁷⁷⁾で蔣の下野を迫るの一策を準備の必要あり 蔣の下野は日本より直接要求すれば却而反對の現象となり 蔣は益々自ら顧みて奇貨とし人民ニ欺きの資料となる 客易ニ下野の實現ニ至ら⁽⁷⁸⁾結局戦争の長期性ニ至るのみ 之れを方法換へて各反蔣派ニ反蔣の機運を作らせ漸次ニ平和と反蔣との相連鎖して平和表面ニ現はす 反蔣は始めは裏面で行ひ 一朝愈々平和成立する暁は蔣の下野にも到達する時を進行して 今より支那の國內の反蔣派ニ其機運を熟させる様にされた方が一石二鳥と思ふ 全面平和も自然ニ道を開けるものとなる 時局の處理の實現ニ至れば兩國の不幸事も早く解消せられて 日本は益々南進政策の發展の道ニ上らんとす 國運を開拓する道に專一の必要あり

五、占領地内支那人民の生活の安定と改善

支那人民は勿論一刻も早く平和の恢復を渴望するも 重慶政府國際の援助を新段階ニ入りと汪氏南京政府還都と唱へ 全國平和を標榜し人民は大ニ期待せるも 今や全面平和の實現ならぬ許りてなく人民ニ失望せられ 依りて平和は局部ニもならぬ汪の名望も一掃され 蔣は益々日本の政治工作は悉く失敗に帰せりと攻撃し 残り軍事あるのみと人民ニ宣傳の材料とす 故ニ南京よりも北京の方が地の利と人民の和と比較的多分ある故へ 先づ北京より人民の安定と日常生活の改善治安を圖り 日本の不利とならぬ範圍で充分改善する餘地あると認むる事ある筈 併し之れも談は易し行ふは難し 有為の為政者であらざれば到底望めぬ事て人物の選良する

を相俟つて急ニ積極的なるも消極的の善政假て物價昂上の未然ニ抑へ人民偷安の風俗を矯正し反蔣の徹底なる人を選び親切ニ人民を善導して支那の各地の模範的政治を布き各地より各派共之れを憧憬される程の良政を布きば占領地の人民は非占領地の人民よりも尚ほ安居樂業ある様にすれば自然為政者の崇徳ニ服す引いて日本の徳ともなる各地の反蔣派之れを聴きば華北の為政者ニ敬服すれば反蔣の事は各地より北京へ来りて聯絡を取り反蔣の業も事半はにして功を倍す故ニ占領地の人民の幸福を作る事須臾にして離るゝ可からず生活の安定と

向上する事は人民の幸福のみでなく戦争の早く解決する事にも役割ニなる人民華北の為政者絶対信頼せば支那の該⁽⁷⁾で云へば文王七十里を徳政王道であれば周ニ君臨す今日と雖とも支那人民は忘れずニ謳歌して止まぬ併し之れは北支ニ於て日本軍の首脳部と華北の〔冀察〕政務委員會の委員長とは一身⁽⁷⁾同体を細大なく協力し得る人であらされば此大任果す事も又困難とならん何れ人物を得ても却て打ち解ける事となる希くば政府は宜しく注意せられん事を切望して止まぬ次第であり〔以下欠カ〕